

平成十七年十二月一日発行 第十七卷第十二号 通巻第一七四号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成17年12月号

岡井省二創刊



寒  
露

高橋将夫

待つてゐるうちは初鴨来ざるなり  
人の世を知らず鈴虫鳴いてをる  
花園に睡魔がそつと来てをりぬ  
瓢の実が魔笛となつてゆくごとし

萩の声はるかなりけり荒御魂  
コスモスと思へばカオス鱗雲  
ほどけなくなつてをりけり踊の輪  
わたつみの道なき道を秋刀魚くる  
真魚まおと子が言うてをる寒露かな  
有明の十住心論なりし  
身に即し仏と成れる秋の山

マ ン ダ ラ

谷 岡 尚 美

吾亦紅の明野となるや省二の忌  
野分雲流るる方や伊勢の海  
銀杏散る鹿野に眠る物語  
投入堂の麓にはちす咲いてをり  
秋時雨日の当りたる山の色  
二上山に棲みし木霊や秋のこゑ  
事もあるうに戸が潰すつづれさせ  
堅香子の山懐に畝傍山  
月明に五劫集ある寿限無かな  
枯蓮もし坐るなら瞑想す

特別作品

小面のいそいそ夏炉焚きにくる  
栗はぜてデカンシヨのこゑ近づけり  
揚花火前後左右の闇深し  
霧流れ高<sup>か</sup>野<sup>う</sup>山<sup>や</sup>伽藍の明らけし  
一刀彫の猩猩々の舞秋の昼  
水の秋猩猩々に聲かけらるる  
槐マンダラ鯨と犀と刀豆と  
行く秋や太地に鯨博物館  
夜半の秋ランプシェードに鯛の鯛  
金風の中に大日如来かな

# 槐安集

市場基巳

梅雨荒れの山より瘦せてもどりけり  
熊蟬の鳴ける人氣のなき木立  
玉虫と言ふ美しきものに曝す  
枝離れをるも同じ実栗青し  
雲動きぬて沢蟹に日をこぼす

水野恒彦

男みな白き骨もつ真葛原  
省浄忌銀河流るる音の中  
天心にばかりに向ひ曼珠沙華  
萱の穂のとうとうたらりとうたらり  
人形を燃してもらふ秋の晝



石脇みはる

とつおいつ全き容の毒茸  
一筋の臙脂の帯の秋の潮  
孔雀明王鬼灯の二三本  
月光の緋扇貝を食しぬたり  
つかつかと瓢に寄つてゆきにけり

竹内悦子

月が赤い息をひそめて曼珠沙華  
人の世に木の实降りをり雨降りをり  
吾亦紅われもわれもと立ちあがる  
托鉢の僧や小鳥の来てゐたる  
はまなすの不思議とおもふ実なりけり

延広禎一

巫<sup>かんなき</sup>の掌に白桃や五芒星  
鯨飛んでとんで南京たますだれ  
世阿弥忌の熟るるに早きおけさ柿  
メドウサの膝を枕に良夜たり  
穴に入る蛇に風流囃子かな

栗栖恵通子

流星のあそびヴィシユヌの手足かな  
炭酸にあぶく高きにのぼりけり  
それぞれの致死量曼珠沙華の列  
台風の目にをるけつねうどんかな  
足枕高きを雁のわたりけり

中島陽華

縁先に佛寝てをり雁の夜  
チゴイネルワイゼン流れ茸山  
高殿のあんま膏藥紅葉山  
小町百歳像苦瓜爆ぜにけり  
和藤内見掛けずなりぬ秋灯

加藤みき

秋茗荷足のまはりに水湧いて  
蓮池の枯はじまつてある青さ  
嵐過ぐ草かげろふの舞台かな  
ふたふりの茴香の実のパウダーよ  
菊日和亀石しると乾びをり

大島翠木

色鳥の出入りほろりと本音かな  
省淨忌はちきれさうな枇杷を剥く  
弁天に入るまで見られ穴惑ひ  
先んじて闇に紛れし酔芙蓉  
冬瓜を抱き街道渡りゆく

雨村敏子

八朔や道の神にもこゑかけて  
処暑の日の明け方の雨雑木山  
ピーナッツ雲が流れてゆきにける  
にこにこと冬瓜のこの肥りやう  
赤棉の吹かれてをりし頭陀袋

黒田咲子

双眸の濁りをぬぐふ省二の忌  
二百十日をとこの使ふ糸切歯  
瓜坊のきのふの傷にけふの傷  
尾花蛸呑みこみどきと思へども  
磴の数ちいと多かり野分哉



# 槐市集

前田美恵子

この下は珊瑚の化石花芒  
継ぎはぎの縄文土器よ木の実落つ  
白球の投げ込まれたる大花野  
調教のなほ未完成ちちろ鳴く  
いつまでも残つてをりし柿の渋

松下八重美

連れ立ちて足湯してをり野分晴  
木の梢にとどまりゐたる濃霧かな  
今日よりは坂東めぐり萩の花  
おずおずと馬刺食したる良夜かな  
曼珠沙華鼠の穴のありにけり

松原伸子

颱風外れ爪の三日月揃ひをり  
銀漢や嘘も真もすぐに消ゆ  
死火山は神住む海にいわし雲  
海に出て天心の月風を抱く  
無花果に手の痒きこと山落暉

松本桂子

初鴨の風みちそれで現はるる  
シヨベルカー掬ふがらくた秋彼岸  
秋の川おもひおもひに鶉のあそぶ  
ぎんれい子石の水門渡りけり  
へくそかざら検針の人登りくる



# 槐集

## 高橋将夫選

弥撒<sup>ミサ</sup>の声響く花野を過ぎたれば  
岡崎

岩月優美子

人知れず神の秘すなり葛の花  
岡崎

近藤 喜子

黙示録水たうたうと秋意あり  
騙し絵の窓に九月の光りかな  
ヘラクレス檸檬色づきはじめたり  
仲秋の鳥抱き湖の眠りかな

枚方

近藤きくえ

望月夜いつしか髪は磁気を帯ぶ  
秋気みつ山の力や毘沙門天  
にぎやかに茹菱むいて故郷なり  
枚方

谷村 幸子

玉虫の骸に息を吹く童  
雫ごと青さ残れる檸檬掬ぐ  
棉吹くや夕焼けこやけの声はるか  
秋刀魚食ふ空の青さのレクイエム  
底紅の紅をたたみて散りにける  
満月の百のダチュラの影なりき  
月光のとどくかぎりの暈かな  
十六夜の己が影よぎる影のあり

中野 京子

棉ふいて生駒聖天般若窟  
数珠玉を天に蒔かんとほり上ぐ  
セレナーデ静かな夜の寵馬かな  
若き日や二百二十日の鬼瓦  
秋の蝶足りぬ足りぬと空気吸ふ  
色鳥に見えぬ日もある入日かな  
秋茜 大気圏にて折り返す  
塩舐めて水の甘さよ萩の花  
安城

天野きく江

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

若き日や二百二十日の鬼瓦 天野きく江  
「若き日のロマンス」を想像させる上五。ここで鬼瓦がでてくるとは思いもしなかった。しかし、こんな青春だって、有って何の不思議もない。

(前略)  
弥撒の声響く花野を過ぎたれば 岩月優美予  
花野をすぎたら、ミサが聞こえてきた。日本情緒と西洋文化がごく自然に融合した世界。

からくりの色なき風となりにけり 松原 伸子  
澄みきった秋風を神のからくりだという。いや、掲句のこの簡明な表現と調べこそがからくりなのだ。

玉虫の骸に息を吹く童 近藤きくえ  
生命賛歌。息を吹きかければ玉虫が動きだすとも思っているのだろうか。そんな童がいとおしい。

胡桃割るひとりの部屋のヨブ記かな 西村 純  
一人でいる部屋と胡桃割り人形を想像した。しかし、「ヨブ記」となると一転、苦悩の世界に入る。

底紅の紅をたたみて散りにける 中野 京子  
「紅をたたみて散りにける」にしびれた。鮮やかな底紅が眼前に浮かびあがってくる。

白象や真昼間暗き秋の池 竹中 一花  
木が茂って真昼でも暗い池。でも、白象が配されるほどだから、かしこくも、おごそかな雰囲気のある池なのであろう。

望月夜いつしか髪は磁気を帯ぶ 近藤 喜子  
古来、名月は風流の極み。望月は榮華の姿。ところが、掲句は磁気である。けっこう神秘性もありそう。でも、一挙に「統一の場の理論」の世界へ入りそう。

胡麻三粒爆ぜたらいいよと母の聲 近藤 紀子  
胡麻を炒っている。「三粒ほど爆ぜたらもういいよ」という母の声聞こえてくる。こんな日常性もいいもんですね。

秋気みつ山の力や毘沙門天 谷村 幸子  
毘沙門天の憤怒の形相と、それを取り巻く秋気。なるほど力が湧いてきそう。いかにも力が湧いてきそうな句。

風向きの変わる木更津秋の潮 植木 戴子  
木更津といえば「切られ与三郎」。ここで風向きが変わったというのも何かの縁か。それより、木更津は響きが良い。  
波音と同じ呼吸や秋夕日 中田 禎子  
波音を聞きながら、ふと自らの呼吸を意識した。秋夕日から推

して、ゆったりした息遣いなのだろう。

大日や剥きやすきもの桃の皮 奥村 邦子

逆立ちも宇宙のひとつちろろ鳴く 本多 俊子  
逆立ちをしているのも宇宙の一コマ。それより、宇宙に出たら  
逆立ちなんてなくなる。ちろろの泣き声で現実の世界に戻る。

冬瓜の軟毛 白粉の真皮なり 瀬川 公馨  
冬瓜は俳諧的な季語。ここまで客観的に言われてとまどいそう  
だが、それを感じさせない句姿と調べがある。

烏瓜来るなど言うてゐる青さ 大山 里  
まだ青いから来るなど烏瓜が言っている。しかし、行くか行か  
ぬかは、こちらで決めさせてもらいます。

六中観つくつく法師の穴迷路 九童庵 玄  
六中観とは「死中、活あり。壺中、天あり。」等、六つの人の道。  
つくつく法師の長い穴の生活にこれが重なる。

羽抜鶏知らぬかほして卵踏む 万城希代子  
いや、参りました。知らぬ顔して卵を踏んだのが羽抜鶏とはな  
んともシニカル。それでもなんだか憎めない。

京町屋の裏に這出し秋の臺 宇田喜美栄  
熊出ると立札のある花野かな 松下八重美  
秋天や麟麟の首を梳る 岩下 芳子  
闇に穴開けてちろろのしきりなる 犬塚 芳子  
ここよりは縞目模様や毛糸編む 谷岡 尚美